

名詞述語文「A が B だ」の使用率

— 意味と構造の面から —

佐藤 雄 一

0. はじめに

名詞述語文の性質や分類については、多くの先行研究がみられるが、コーパスを用いたものは、管見では今田 (2011)⁽¹⁾ だけである。

本稿では、「A が B だ」という「が」を用いた名詞述語文において、主語名詞「A」と述語名詞「B」がどのような意味関係で用いられているのか、どのような文構造の中で用いられるのかを分析する。

コーパスを用いて分析をすることによって、先行研究で指摘されてきた「は」と「が」の相違点を数量的な面から裏付けることが可能となる。本稿では『現代日本語書き言葉均衡コーパス』(以下、BCCWJ とする) を用いて分析する。

1. 用例の抽出方法

BCCWJ を用いた名詞述語文の用例検索は、検索アプリケーション「中納言 1.0.2」を使用し、短単位検索を以下の手順で行った。

キーを「品詞」「助詞」AND「書字出現形」「は」に設定し、前方共起(キーから1語)を「品詞」「名詞」に設定した。さらに、後方共起1(キーから1語)を「品詞」「名詞」に設定し、後方共起2(キーから2語)を「品詞」「助動詞」AND「語彙素」「だ」に設定した。後方共起の方は順次繰り下げていき、後方共起1(キーから5語)、後方共起2(キーから6語)まで、検索を行った。検索対象はコアのみである。

その結果、「が」を用いた名詞述語文が365例得られた。佐藤(2013)では、同様の方法で「は」を用いた名詞述語文の用例抽出を行っているが、採集用例数は726例であった。用例数から判断する限りは、名詞述語文においては「は」の方が多く用いられているといえる⁽²⁾。

2. 主語名詞と述語名詞の意味関係

佐藤（2013）同様、高橋（1984）の意味関係^③にもとづいて、「AはBだ」の場合と比較しながら「AがBだ」の主語名詞と述語名詞の意味関係を考察していく。

2.1 「AがBだ」の主語名詞と述語名詞

「AがBだ」においては、「指定」「内容」「性質」「量・程度」「状態づけ」が比較的高い割合を示しているが、群を抜いて高い割合を示すものはない。この点は、「AはBだ」において「性質」の意味関係の割合が高かったのとは事情が異なるようである。

〈指定関係〉

- 1) この関東風と関西風の分かれ目が関が原辺りらしいです。(OY14_09768)
- 2) 田中外相への評価の軸がその外交政策である (PM13_00011)

〈内容〉

- 3) アテネ五輪に二大会ぶりに出場することが課せられた使命だ。(PN3c_00020)
- 4) しかし、日米とも成長を安定軌道に乗せることが課題だ。(PN3b_00011)

表1 「は」と「が」の意味関係の比率

主語と述語の意味関係	「は」の用例数と比率	「が」の用例数と比率
指定関係	64 (8.8%)	54 (14.8%)
数値	44 (6.1%)	3 (0.8%)
内容	42 (5.8%)	50 (13.7%)
とらえなおし	27 (3.7%)	0 (0.0%)
意味説明	8 (1.1%)	0 (0.0%)
種	121 (16.7%)	16 (4.4%)
類	25 (3.4%)	17 (4.7%)
別種	16 (2.2%)	15 (4.1%)
性質	154 (21.2%)	57 (15.6%)
量・程度	37 (5.1%)	62 (17.0%)
関係	2 (0.3%)	8 (2.2%)
存在	12 (1.7%)	8 (2.2%)
反復	2 (0.3%)	5 (1.4%)
状態づけ	108 (14.9%)	55 (15.1%)
動作づけ	23 (3.2%)	12 (3.3%)
文脈依存	41 (5.6%)	3 (0.5%)
計	726 (100.0%)	365 (100.0%)

〈性 質〉

- 5) 特に貴子さんのようなワケありの関係では、二人の間にある基盤がもともと脆弱なものなのだ。(PB43_00044)
- 6) その企業の会長が有名な巨人ファンで、(PN3d_00005)

〈量・程度〉

- 7) 新着映画には、ぞくぞくするようなおしゃれの見本がいっぱいだ。(PM21_00306)
- 8) 通常七割ほどある一等級の上場量が品質の悪化でゼロだったものの、……(PN5g_00016)

〈状態づけ〉

- 9) ハマボウフウの収穫と出荷の作業がたけなわだ。(PN3e_00011)
- 10) 兜がはずれ、鉢巻きをした頭がむき出しだった。(PM31_00326)

2.2 それぞれの意味関係における「AはBだ」と「AがBだ」との比較

「AはBだ」と「AがBだ」の主語と述語の意味関係については、「指定」「内容」「種」「性質」「量・程度」において顕著にみられる。それぞれについて、考察していく。

2.2.1 「指定」と「内容」について

丹羽(2005)は「AはBだ」においてAとBが集合と要素の関係にあるものを指定関係とし、以下の例を挙げている⁽⁴⁾。

- 11) この会社の社長は山田氏だ。
- 12) 彼が買ったものは、りんごとみかんとバナナだ。

11)は集合の要素が一つだけのものであり、12)は集合の要素が複数の場合の用例である。高橋(1984)は、主語と述語が同一のものを指し示しているものを「同一づけ」として、指定文という語は用いていない。

本稿では、述語名詞が主語名詞に該当する要素を示すものを指し、なおかつ主語と述語の意味関係が、数値の提示、内容と枠組み、とらえなおし、意味説明という特徴的なグループとしてくれないものをすべてここに含めている。

指定文の特徴として、「は」と「が」を入れ替えることによって主語名詞句「A」と述語名詞句「B」の交代が可能であるという点があげられる。

- 13) この会社の社長は山田氏だ。↔ 山田氏がこの会社の社長だ。
- 14) 彼が買ったものは、りんごとみかんとバナナだ。↔ りんごとバナナが、彼が買ったものだ。

つまり、指定文は「AはBだ」にも「AがBだ」にも表れることになる。使用傾向としては「AがBだ」に占める割合が比較的高いように見えるが、「指定関係」として比較した

場合、「AはBだ」「AがBだ」どちらのタイプにもみられ、どちらのタイプがより多く用いられるかという顕著な傾向は見られない。

「内容」についても、「指定」と同様の指摘ができる。「AがBだ」の中では比較的高い割合を示しているが、「内容」にみられる「AはBだ」と「AがBだ」の用例数に大きな差は見られない。「指定」同様に、主語名詞句「A」と述語名詞句「B」の入れ替えが可能であることが大きな要因である。先に示した3)、4)の用例は、以下のように書き換えることが可能である。

- 3) アテネ五輪に二大会ぶりに出場することが課せられた使命だ。(PN3c_00020)
- 3') 課せられた使命はアテネ五輪に二大会ぶりに出場することだ。
- 4) しかし、日米とも成長を安定軌道に乗せることが課題だ。(PN3b_00011)
- 4') しかし、課題は日米とも成長を安定軌道に乗せることだ。

2.2.2 「種」と「性質」

「種」「性質」という意味関係は、ともに「AはBだ」の方が高い使用率を示している。「AがBだ」においては「性質」が比較的高い割合を示しているが、これらの大部分は5)のように「ハガ構文」⁽⁶⁾の解説部分に用いられているものや、6)のように従属節内で表れているものである。

したがって、「種」や「性質」では、「Aは」で主題を提示し、述語名詞句「B」で主語名詞句「A」の種類や性質を述べるという形式が一般的であると考えられる。

2.2.3 量・程度

「量・程度」の意味関係を見てみると、「AはBだ」でも用例数が極端に少ないわけではないが、「AがBだ」の用例数の方が多くみられる。これには、構文的な要因と文体的な要因が考えられる。15)に見られるように「ハガ構文」の解説部分に「量・程度」を表す表現が見られることが多い。また、16)のように従属節内（中止形）で用いられるものが多い。このような表現は、データの説明に多くみられる。ただし、「AはBだ」でも17)のように従属節内で用いられるものもあり、「Aは」で示すか「Aが」で示すかは単に述べ方の違いが表れているだけであるという見方もできる。

- 15) マスコミで報じられる子供たちの実態は、マイナス・イメージのものがほとんどである。(PB57_00012)
- 16) 十五年を違反態様別に見ると、不法残留が5818件で最も多く、(OW6X_00045)
- 17) 薬物を使用していた者の比率を見ると、使用していた者は17.1%であり、前年よりも2.1ポイント低下している。(OW6X_00017)

以上、名詞述語文の主語名詞句と述語名詞句の意味関係を、「AがBだ」と「AはBだ」を対比させながら述べてきた。主語名詞句と述語名詞句の入れ替えが可能なものについては、

使用率にも大きな差がなく、「種」や「性質」を表す表現では「AはBだ」の比率が高いことが明らかになった。

次節では「AがBだ」の構文的な特徴について考察していく。

3. 構文的特徴

3.1 主節か従属節か

「は」と「が」を比較した際、前者は主題提示として用いられるため従属節内では用いられにくく、逆に後者は従属節内で用いられやすいという傾向が予測できる。従属節といっても、その独立度は形式によって異なる⁽⁶⁾。

本稿では、従属節を以下の項目に分類し、「は」と「が」がどのような従属節で用いられているかを比較した。

表2 「は」と「が」が用いられる従属節の種類と比率

	「は」の用例数と比率	「が」の用例数と比率
～が	52 (16.7%)	26 (12.0%)
引用	52 (16.7%)	32 (14.8%)
逆接	10 (3.2%)	3 (1.4%)
条件	1 (0.3%)	23 (10.6%)
対比	1 (0.3%)	5 (2.3%)
中止	148 (47.4%)	60 (27.8%)
理由	39 (12.5%)	23 (10.6%)
並列	3 (1.0%)	3 (1.4%)
比況	0 (0.0%)	3 (1.4%)
名詞節	1 (0.3%)	13 (6.0%)
連体節	5 (1.6%)	25 (11.6%)
計	312 (100.0%)	216 (100.0%)

まずは、用例全体に占める従属節の割合であるが、「は」が726例中312例(43.0%)であるのに対して、「が」は365例中216(59.2%)であった。予測通り「が」の方が従属節内で用いられる頻度が高いことがわかる。

従属節内の用法については、名詞節、連体節、条件節で「が」の使用比率が高くなっている。これらの節は、従属節でも自立度の低いものであり、自立度のより低い従属節内では「が」が選択されやすいという傾向が明らかとなっている。

中止形では「は」の使用比率が高くなっている。便宜上、中止形(連用形)という項目を立てたが、あくまで形式の問題であって「は」で提示された主題が連用節内に収まるという

ことを意味するものではない。この点は、同じ中止形であっても、「が」が意味的に従属節内に収まるのとは大きな違いがあり、むしろ「は」を用いた構文の特徴の一つといえるだろう。

18) 天皇は公的な存在であって、私的な判断はできない、(PN1d_00016)

19) 北朝鮮問題は向こう岸の話ではなく、橋のこっち側にある。(PN3f_00016)

「は」は以上のように、主題名詞の意味が従属節の述語名詞だけでなく、文末までかかっていく用法が圧倒的に多い。しかし、「は」のすべての用例が文末までかかるわけではない。以下の例のように「は」が従属節内に収まる用例もある。

20) 男の人の髪は金色で、女の人の髪はピンク色だった。(PB39_00023)

21) 私たちの部屋は三階で、ベランダに続くガラス戸を開けるとすぐそこに海がある。
(PB39_00023)

20)は対比の用法で、対比の用法が文末までかからないことは、これまで指摘されているとおりである。21)は対比の用法ではない。「私たちの部屋は…ガラス戸を開けるとすぐそこに海がある」というように、文末までかかっているという解釈も可能であるが、18)、19)の用例に比べれば、主題に対する解説がかなりずれている。

「は」が文末までかかかるとの対して、「が」の場合、「名詞句」が従属節内に収まる例が多い。22)、23)はいずれも、文脈上、主題が設定されていて、それに対する説明部分となっている。同様の中止形は、「ハガ構文」にもみられる。

22) 「奇想天外：マダム貞奴マダム貞奴オッペケペー人生」明治時代を舞台にした、人情劇。近藤正臣が共演で、笑いあり涙ありの話だったが、(OY14_01595)

23) 横浜市は三年前から、独自の基準で無認可保育所に助成する「横浜保育室」制度を始めた。定員二十人以上、三歳児未満の施設が対象で、今では百八カ所に増えた。
(PN1a_00005)

22)は、「奇想天外」という劇についての説明であり、文脈上この劇が主題であることがわかる。つまり、意味的には「(奇想天外は) 近藤正臣が主演で…」という解釈になる。23)も同様に、文脈上「『横浜保育室』制度」が主題となっている。

中止形の独立性は、形式だけでなく、主節との意味関係も考慮したうえで判断する必要があるが、その点についての詳細な分析はここでは行わない⁽⁷⁾。

3.2 ハガ構文

野田(1996)は、「ハガ構文」を構造の面から次の6つに分類している。

- ① 「この本は父が買ってくれた」型
- ② 「象は鼻が長い」型
- ③ 「カキ料理は広島が本場だ」型

- ④ 「辞書は新しいのがいい」型
 ⑤ 「この問題は解くのが難しい」型
 ⑥ 「このにおいはガスが漏れているよ」型

①のタイプは「～を」や「～に」などの格成分や、「昨日」のような副詞的成分が主題の「～は」になったものである。「この本を父が買ってくれた」の「この本」が主題となっているようなタイプである。

②のタイプは格成分の名詞を修飾する「～の」が主題の「～は」になったものである。「象の鼻が長い」の「象」が主題となっているようなタイプである。

③のタイプは述語名詞を修飾する「～の」が主題の「～は」になったものである。「広島がカキ料理の本場だ」の述語名詞「本場だ」を修飾している「カキ料理」が主題となっているようなタイプである。

④のタイプは格成分の中の、修飾部を持つ名詞が主題の「～は」になったものである。「新しい辞書がいい」の「新しい」という修飾部を持つ名詞「辞書」が主題となっているようなタイプである。

⑤のタイプは従属節の中の成分が主題の「～は」になったものである。「この問題を解くの」という従属節（名詞節）内の「この問題」が主題となっているようなタイプである。

⑥のタイプは①～⑤のどのタイプにも属さないものである。

BCCWJの検索で得られた「ハガ構文」は、110例（うち従属節は50例）であった。名詞述語文365例のうち約1/3が「ハガ構文」ということになる。これをタイプ別にみると、表2の通りとなる。

表3 ハガ構文のタイプ別用例数と比率

	用例数と比率
① 「この本は父が買ってくれた」型	37 (33.6%)
② 「象は鼻が長い」型	20 (18.2%)
③ 「カキ料理は広島が本場だ」型	45 (40.9%)
④ 「辞書は新しいのがいい」型	6 (5.5%)
⑤ 「この問題は解くのが難しい」型	1 (0.9%)
⑥ 「このにおいはガスが漏れているよ」型	1 (0.9%)
計	110 (100.0%)

それぞれのタイプの特徴について考察していくことにする。

①のタイプには、以下のように時を表す名詞が副詞のように用いられたものも含めた。

- 24) この冬は、ファーバッグが大活躍です (PM51_00077)
 25) 今は面接の練習や志望書のチェックなど、実践的な指導が追い込みだ。(PN4e_

00017)」

また、野田（1996）では、「～には」「～では」のように格助詞を伴った主題も①のタイプに含めている。BCCWJでは以下のような例が見られる。

26) 『ローマの休日』では、親善旅行中の王女アンがA・ヘプバーンの役どころだ。

(PM11_00013)

27) 人間離れした人物の伝説には、人間離れした出生の秘密がつきものだ。(PB29_

00026)

このように格助詞とともに主題化されるタイプは、25例ある。①のタイプのうち大部分(約68%)が「～で」「～に」を主題化したものである。「に」も「で」も場所や空間(あるいは物事を場所化、空間化してとらえる)を示すものであり、このタイプの「ハガ構文」の比率が高いということは、時間や場所を主題として提示し、その時の状況やその場の状況を説明するという文構造が、日本語の表現のひとつの典型であることを示しているといえるだろう。

②のタイプには次のような例が含まれる。

28) この写真はトリミングが秀逸です。(OY15_02266)

29) 苦勞して産んだ舞ちゃんは、存在自体が貴子さんの宝だろう。(PB43_00044)

「ハガ構文」の典型としてとらえられがちなタイプであるが、「ハガ構文」中での使用率はそれほど高くはない。

③のタイプには次のような例が含まれる。このタイプは名詞述語文の「ハガ構文」の中で最も用例数が多いタイプである。

30) 東海道線の置き石事件は、カラスの貯食が原因だった。(PN1c_00005)

31) 移植手術は、血管の処理が中心である。(PM31_00275)

野田（1996）は、このタイプの文について「述語はかならず『本場だ』のような名詞述語になる(p.46)」と述べ、このタイプの述語となる代表的・典型的な名詞を1)「特徴」類、2)「中心」類、3)「原因」類、4)「目的」類、5)「基盤」類、6)「限度」類の6種類に分類している。

ここでは、2)の「中心」類について考察する。このタイプに含まれる述語には、「中心、主流、代表、主役、本場、主産地、標準、定説」など「何らかの意味で、ものごとの中心や代表を表す名詞(野田1996, p.46)」が挙げられている。さらに、数量を表す「ほとんど、大半」や時期を表す「最盛期、旬」などが挙げられている。

ここで問題となるのは、「数量を表す」表現である。BCCWJには以下のような用例が見られる。

32) マスコミで報じられる子供たちの実態は、マイナス・イメージのものがほとんどである。(PB57_00012)

33) 内容は戦術の確認が大半ですが、…(PM41_00192)

34) 放射線科の技師はほとんどが女性だった。(PB54_00027)

「ほとんど」「大半」のような数量を表す表現は、「ハガ構文」においては「が」を伴って用いられる場合(例32, 例33)も、述語として用いられる場合(例34)もある。そして、これら数量を表す表現がどの位置に現れるかによって、「ハガ構文」における文のタイプが異なることは野田(1996)も指摘している。

上記の例では、「マスコミで報じられる子供たちの実態」「放射線科の技師」はいずれも「ほとんど」を修飾している(「～実態のほとんど」「～技師のほとんど」)。しかし、前者では「ほとんど」が述語として、後者では主語として用いられているために、「ハガ構文」の修飾関係においては、異なったタイプに位置付けられることになる。

では、「が」の前後に「数量を表す」表現を伴うタイプの文を、主語名詞句と述語名詞句の意味関係に着目した場合はどうなるか。

「～がほとんどだ・大半だ」となると、「量・程度づけ」という意味関係となり、「ほとんどが・大半が～だ」となると、「性質づけ」という意味関係となる。

つまり、構文関係と意味関係が連動しているということになり、どちらの表現も可能な場合、どのような意味関係として表現するかによって構文の選択がなされることになる。

「数量を表す」表現については、このような特徴があるのに対して、同じグループに属している「中心」類については、述語として用いられることがほとんどである点を考慮すれば、「中心」類と「数量を表す」類を分けて考える必要があるだろう。

一方、1)「特徴」類、3)「原因」類、4)「目的」類、5)「基盤」類、については、主語と述語の意味関係を考えると、いずれも主語名詞句が「特徴」や「原因」、「目的」を具体的に述べた内容となっていることから、高橋(1984)の言う「内容とわくぐみ」という大きなくくりでとらえることが可能である。30)では「原因」の具体的な内容が「カラスの貯食」となっている。

④のタイプには次のような例が含まれる。

35) ヘッドスピードは松井のほうが上じゃないかな (PM21_00189)

36) 素材は、シルクや綿などのシースルーが圧倒的な人気だ。(PN2c_00015)

いずれも「松井のヘッドスピード」「シースルーの素材」という被修飾名詞が主題として提示されたものである。

⑤のタイプに該当すると思われるのは、次の一例のみであった。

37) 母は、…つねに正装のまま仮眠をとることが精一杯だったという。(PB54_00027)
「母が正装のまま仮眠をとること」という従属節(名詞節)内の成分である「母が」が主題化されたものである。

⑥のタイプに該当するものはみられなかった。

以上のように、「AがBだ」タイプの名詞述語文をBCCWJで検索すると、「ハガ構文」の一部となっている用例が約1/3を占めることがわかった。「ハガ構文」に見られるような、

意味関係の5つのタイプは、文脈上に主題が設定されている場合にも適用できる。形式上は独立した「AがBだ」という名詞述語文に見えるが、前文脈に主題が設定されていれば、その主題に対する解説が「AがBだ」の部分で述べられ、意味的には「ハガ構文」と同じタイプになっているものがある。

次にこのタイプの文について考察することにする。

3.3 前文脈に主題が設定されているもの

「ハガ構文」は、一文中に主題が提示され、その解説部分に「AがBだ」という形式が表れる構造である。しかし、主題が前文脈中に提示され、形式的には「AがBだ」という名詞述語文であるが、意味的には前文脈で提示された主題の解説部分を構成している「AがBだ」というタイプの文がある。このように前文脈中に主題が提示される「AがBだ」の用例は90例あり、「ハガ構文」(110例)と前文脈中に主題がある用例を合わせると、200例となる。名詞述語文「AがBだ」365例中、200例が主題に対する解説部を構成していることになる。

用例にもとづいて考察していく。

38) 維新派は70年に旗揚げし、去年はドイツやイギリスで公演した。物語性より視覚性を優先させる舞台が特徴だ。(PN2a_00022)

39) あさりの蒸し汁もむだなくからめた、簡単ボンゴレスパゲティ。トマトの酸味がアクセントです。(PM31_00031)

いずれも前文脈に「維新派」(劇団)、「ボンゴレスパゲティ」という主題が提示されており、その解説が「AがBだ」という形式で述べられている。主題と解説部分の意味関係を「ハガ構文」と同様に分類してみると、これらの文は主題が述語の修飾成分となる③のタイプに分類される。それぞれ「維新派の特徴」「ボンゴレスパゲティのアクセント」の修飾部分が前文脈で主題として提示されていると解釈される。

次の用例は「ハガ構文」の②のタイプに分類されるものである。

40) 中曽根首相が内政面で掲げた目標は「戦後政治の総決算」。その最大の課題が行政改革だった。(PN3a_00011)

41) 「ムダを省いたコンパクトさが魅力です」スバル R1…内装も凝っていて、赤いパネルがポップな印象ですね。(PM51_00057)

40)では「その」が前文脈の「戦後政治の総決算」をうけており、41)では「赤いパネル」は前文脈にある「スバル R1」の「赤いパネル」である。いずれも格成分を修飾する「～」が主題となっている。

前文脈に主題を持つもタイプを、全て「ハガ構文」と同じように分類できるわけではないが、分類可能なものの大部分は②と③のタイプであった。

3.4 主題が設定されていないもの

3.2 および 3.3 で、「ハガ構文」と前文脈に主題を持つものについて考察してきたが、当然のことながら主題をもたない「A が B だ」もある。特徴的なタイプをいくつか考察する。

3.4.1 現象文

現象文は眼前描写や中立叙述といわれるもので、典型的には動詞述語文に多く見られるものであろうが、名詞述語文にもみられる。

42) …上框の正面が、取着きの狭い階子段です。(PN5f_00020)

43) 「いちごミルク」という品種で、赤と白のかわいい花がいっぱいです (写真 5 枚目)。(OY05_00297)

44) バナナが…品薄なんだってね。(OY14_21838)

45) 「女手ひとつで苦勞しながら育てた一人息子が病気でね。(PM41_00071)

以上の用例は、現場や写真の状況描写となっており、「ここは」、あるいは「この写真は」という文脈的な主題が提示されており、それに対する解説が「A が B だ」という形式で行われていることになる。また、44)、45)のように視覚的ではない状況描写の用例も見られる。

このように眼前の(あるいは現在置かれている)状況を言語化されていない主題ととらえるなら、「ハガ構文」から現象文までを連続的にとらえることができる⁶⁾。すなわち、主題を一文中に明示した名詞述語文が「ハガ構文」であり、前文脈の主題を引き継いで表現する「A が B だ」のタイプがあり、さらに前文脈ではなくその場の状況を主題とした「A が B だ」という現象文があるという連続性である。

「○○は、A が B だ」	→	「○○」。	「A が B だ」	→	(○○)「A が B だ」
主題が文中にある		主題は前文脈にある			発話時の状況が主題となる

以上のように、主題が明示されている「ハガ構文」から、前文脈に主題が提示されている文を介して「A が B だ」の中立叙述は、連続的に捉えることが可能である。

さらに、丹羽 (2005) のように「A は B だ」というウナギ文が「A は (S が) B だ」という文(「ハガ構文」とみなすことができる)から成りたつとするなら、「ハガ構文」からいくつかのタイプの名詞述語文が派生するというとらえ方も可能であろう。

3.4.2 主部が述語の説明をする

主題が設定されていない以下のような例がある。これらは、状況を説明するものではないため、主題が隠れている(陰題)という見方はできない。述語名詞の性質を主語名詞句で詳しく述べるものであり、物事を定義づける(性格づける)タイプの文である。

46) その理想の技術体系を具現化させるために必要な全ての課題を抽出し、その全て

を研究開発・実用化することが研究であるが、… (PB45_00024)

- 47) この貧乏自慢ドーダが明治まで流れこんで刻苦勉強主義となり、外来の清貧思想であるマルクス主義とブレンドされて出来た最悪の思想が日本の共産主義である。
(PM31_00241)

これの用例は、「研究とは」「日本の共産主義は」と述語名詞を主題として、文を書きかえることも可能である。

4. まとめと課題

本稿では、名詞述語文「A が B だ」における主語名詞句と述語名詞句の意味関係と、構文的特徴について考察してきた。

主語名詞句と述語名詞句の意味関係においては、「指定」と呼ばれる関係を示すものは「A は B だ」も「A が B だ」もほぼ同じ割合で使用されていることがわかった。これは、「指定」が主語名詞句と述語名詞句の入れ替えが可能であることが要因であり、意味関係が構文的特徴にも反映され、それが使用率として表れていることが明らかになった。

また、「種」「性質」を表す意味関係においては、「A は B だ」が多く用いられており、「指定」が「A は B だ」の特徴であることが使用率の面からも裏付けられた。

文構造においては「A が B だ」という形式が、「ハガ構文」から「現象文」への連続性の中に位置づけられることを使用率の面から明らかにした。しかし、従属節内の「A が B だ」が、文中の他の成分（主題も含めて）とどのような関係を持っているかについては、考察できなかった。今後の課題としたい。

従来、「A は B だ」と「A が B だ」は、それぞれ単文レベルでの比較によって「は」と「が」の働きの違いについて論じられることが多かった。しかし、BCCWJを用いた使用率を比較してみると、「A が B だ」が独立した単文で用いられる率はそれほど高くはない。前後の文脈や、主節との意味的・構文的関係の分析にもとづいた「A は B だ」と「A が B だ」の比較が必要となるだろう。

〈注〉

- (1) 今田 (2011) は主語の意味分類について述べたものであり、類型ごとの数値化は行っていない。
- (2) 石川 (2013) では、名詞述語文だけでなく名詞に接続する「は」と「が」の選択率について BCCWJ 全体を検索している。その結果は「が」の頻度が 49.28%、「は」の頻度が 50.72% となっており、BCCWJ 全体では「が」の使用頻度の方が高いという結果が出ている。
- (3) 高橋 (1984) は、名詞述語文における主語と述語の意味的な関係を、動作づけ、状態づけ、性格づけ、同一づけの 4 つに分類したうえで、性格づけと同一づけはさらに細分類している。
 - (1) 動作づけ (述語が主語のさしめすものごとの運動をさしめしているもの)
 - ・われわれもいよいよあす出発だ。

- ・今夜のことはだれにも絶対に秘密よ。
- (2) 状態づけ
 - ・震災の時、彼女は一年生だった。
 - ・だ」から君はいまちゅうちょすべき時じゃない。
- (3) 性格づけ
 - 性質づけ (内包)
 - ・彼女は陽性だ。
 - ・彼女は陽気な性質だ。
 - ・座敷は六畳だ。
 - ・座敷は六畳の広さだ。(量・程度づけ)
 - ・家はあの下だ。
 - ・出入り口は一ヶ所だ。(存在づけ)
 - ・AとBは正反対だ。
 - ・彼らはいいい友達だ。(関係づけ)
 - 種類づけ (外延)
 - ・さそりは虫よ。(上位概念で性格づける類づけ)
 - ・太郎はよい人間だ。(何らかの内包で制限された上位概念で性格づける種づけ)
 - 別種類づけ (本来のカテゴリーとは別の系列のところに位置づける)
 - ・私は畜生だった。
 - ・彼は文壇の電信局だ。
- (4) 同一づけ (主語と述語が同一のものを指し示している)
 - ・これは、きのうのきっぷだ。(現象形態がちがう)
 - ・これはライラックだ。(一つの現象形態にあるもの)
 - ・パンをくったのは、おれだ。(ひっくりかえし文)
 - ・石本の話というのは、健作の結婚のことだ。(内容とわくぐみ)
 - ・電気を消すのが私のしごとだ。(できごとや動作とその概念化)
 - ・シメキとは情婦の意味だ。(意味するものとされるもの)
- (4) 用例の番号は筆者。
- (5) 本稿では「AはBがCだ」のように、ひとつの文中に「は」と「が」が表れる構文を、便宜上「ハガ構文」としておく。「二重主語」や「複主格」と呼ばれている構文で、「私はワインが好きです」のような対象を表す「が」を含む構文は除外する。
- (6) 従属節の自立度については、南 (1974), 益岡 (1997)。
- (7) 引用形式も従属節に含めているが、これを除けば「は」は35.8%、「が」は50.4%となるが、「は」の方が従属節に用いられる頻度が少ないという点はかわらない。
- (8) 佐治 (1991) は、「山が美しい」のような形容詞文は (状況)—山が美しい のように状況を主題とする叙述であるとして、「状況陰題」と述べているが、名詞文についても同様に考えることができるだろう。

参考文献

- 今田水穂 (2011) 「日本語名詞述語文の種類と主語の意味分類について — 京都大学テキストコーパスと分類語彙表を用いた調査・分析」『文藝言語研究 言語篇』60 筑波大学文藝・言語学系
- 石川慎一郎 (2013) 「テキスト関連属性と助詞選択：計量的アプローチに基づく探索的研究 — 主語・主題を導く『は』と『が』をめぐって —」『第4回コーパス日本語学ワークショップ予稿集』国立国語研究所
- 佐治圭三 (1991) 『日本語の文法の研究』ひつじ書房
- 佐藤雄一 (2013) 「名詞述語文『AはBだ』の種類と使用率」『共立国際研究』30 共立女子大学国際学部
- 高橋太郎 (1984) 「名詞述語文における主語と述語の意味的な関係」『日本語学』3-12 明治書院
- 丹羽哲也 (2005) 「名詞述語文、形容動詞述語文、ウナギ文」『日本語科学』18 国書刊行会

野田尚史（1996）『「は」と「が」』くろしお出版
益岡隆志（1997）『複文』くろしお出版
南 不二男（1974）『現代日本語の構造』大修館書店

The Relative Frequency of Noun Predicate Sentences
with the structure “*A ga B da*”:
From the Viewpoint of Meaning and Structure

Yuichi Sato

Noun predicate sentences with the structure “*A ga B da*” have certain distinctive features when compared with sentences with the structure “*A wa B da*”.

Data from the Japanese corpus (BCCWJ: The Balanced Corpus of Contemporary Written Japanese), make it clear that when a noun predicate indicates quantity or degree, the noun predicate sentence-form “*A ga B da*” is more frequently used than the form “*A wa B da*”. When the relation between a subject and its predicate indicates framework and content, “*A ga B da*” sentences are again more frequently used.

From the viewpoint of structure, “*A ga B da*” is more frequently used in subordinate clauses. “*A ga B da*” can be analyzed as the structure that is formed after the omission of the topic in a double-subject construction.